

一 全人格を打ち込んで

徹底的なれ、徹底せよ。皮相を去れ、中途半途を除け。徹頭徹尾、自己の全人格を打ち込め、全努力を注ぎ、全精神を集中せよ。是れ我等が信念に赴く唯一の法たるべし。徹底の語、もと禪家に出で、其の之に到らざるものを未徹底として排斥せらる。而して之を喩顯するに三獸渡河の事を以てす。兎の河を渡る、水の表面を飛び、馬の河を渡る、脚其の底に達せず。象の河を渡る、脚痕を水底に印す。兎はこれ皮相の悟、馬はこれ未徹底、象に至つて初めて徹底す。我等をして萬事、象の河を渡るが如く徹底せしめよ。皮相に止まる勿れ、未徹底にある勿れ、底を究め、底を叩けよ。

事をなす、須らく徹底的なれ。百藝に通ぜんよりは、寧ろ一藝に達せよ。才子多病、器用貧乏とは、昔から相場のきまつたもの。何でも出来ると云ふ人は、その一つ一つを完成することの出来ない人である。一事は萬事、一事に徹底すれば、これを萬事に應用することが出来る。其の一事にも徹底することの出来ないものが、云何しか萬事に通ずることを得やう。佛に十大弟子あり、各その一能に達す。智慧に於て舍利弗、神通に於て目犍連、頭陀に於て大迦葉、多聞に於て阿難、説法に於て富樓那。解空、論議、天眼、持戒密行に於て、須菩提、迦旃延、阿那律、優波離、羅睺羅と、皆一行に達して以て能く全體を領得したのであります。吾人に成すべく與へられたるものは、事の大小を問はず、徹底的に遂行せよ。決して胡魔化してはならぬ。一時の小蹉跎に逡巡し、小障碍に辟易し、成すでもなく、成さぬでもなき中途に彷徨するは、徒に時間を空過するばかりで、何等の功もない。成すならば、飽迄なせ。止むるならば、潔くやめよ。皮相、未徹底ほど、他を誤り自を害するものはないと知れ。

物を見る、須らく徹底的なれ。明敏に確實に徹見せよ。朱利槃特は第一本
で大悟に達し、俱胝和尚は指一本にて證悟に徹したではないか。枝頭の林檎
何故に地に落ちしぞ。雲烟過眼視するものには、玄微なる引力の大法を發見
することは出来ない。ニュートン獨り能く、之を發見して、物理學史上、一
大革命を興へたでありませんか。沸騰蒸發する湯氣に、重き鐵瓶の蓋は、何
故に上るぞ。雷鳴する時、紙鳶の糸は、何故に持つ手に響を與ふるぞ。之を徹
底的に考察し徹見して、ワットは蒸氣力の利用を創造し、フランクリンは電氣
力の應用を創造し、以て人類生活上、一大革新を來たしたではありませんか。
我等をして、徹底的觀察の良風を養はしめよ。曾て聞く。人あり、口にすべ
からざるほどの熱湯を、コップに盛つて佛蘭西人の前に出すとせよ。佛人は
憤然として、此の如きもの飲み得べきでない、之を打ち退ける。英吉利人
は莞爾として「これは如何にも熱い、少し水を入れて下さい」と、如才なく
請求する。露西亞人なれば、ヂットその冷むるを待つて徐に之を飲む。大
量な鷹揚な所がある。獨逸人は如何。此の熱湯、如何にして飲むべきかと、
工夫に工夫を積んで、遂に飲み得るに至らしむるとか。英・佛・露・獨、四國人
の氣風、列べ得て妙でないか。我等は果して、獨逸人の徹底的なる處に、學ぶ
べきものがないであろうか。

事をなす、物を見る、須らく徹底的ならざるべからざると共に、修養信仰
亦徹底的ならざるべからず。佛心とは大慈悲是れなり。須らく佛心に徹見せ
よ。中途半途なアヤフヤな信仰で、片付けて置いてはならぬ。如來の大命を
何と聞く。

一切の人は、老ゆる人と、老いたる人とに攝められる。何れも老ゆると云
ふことは免れない。従つてその前途を眺むる時、一様に死といふものに慄く。

丁度涯のない荒野を、トボぐと夕日を追うて行くやうなものである。多くの若い人は、此の死を遠い彼方の霞の奥に埋めて見まいとし、多くの老人達は、前途が短いだけに、いつも行先に背を向け、後すざりに歩んで居る。焉んぞ知らん、若い人の脚下は死の谷である。老人達の背後は死の溝である。この實相が云何して大膽に眺められやう。だから、若い人はいつも、向ばかり見て脚下を見ない。老人達はいつても、後退りに歩みながら、來し方のみ思出で、喜んだり悔んだりしつゝ、力めて其の背後を見まいとする。これが果して眞面目な態度であらうか。我等は大膽に此の實の相を見ねばならぬ。たつた一度でもよい、眞に此の相を眺めた人ならば、自覺した人である。自分の價値を見た人である。眞の人生に觸れた人である。茲に於て、如來の大悲にぞつこん徹底さして頂ける。

或るお寺の堂内に、老婆がいつもくお参りして、何やら小聲に獨言を申しつゝ念佛するのを、腕白小僧、耳を澄して聞いて居たら、「私もつくぐ娑婆が厭になりました、折角生き残つた親でありながら、嫁は邪魔物にするし孫は相手にしてくれず、息子さへ嫁にまかれて兎や角と小言を云ふ、ほんに娑婆が厭になりました、早くお引取下さいませ」と云ふのであります。來る日も來る日も、そんなことを云つてるので、小僧もフト出來心を起したのか、次の日例の如く老婆がやつてきて、定まり文句を繰返すのを聞きすまし刀おツとり、須彌壇の後から、小僧躍り出て、「さらば願の通り、いよく引取つてやるぞ」と、大音聲につれて、ギラリと閃く太刀影に。婆さん驚愕して、向拜口へ飛出し、箱段から轉げ落ちて、シタタカ腰を打ち、「ヒイく、佛様はものを仰しやらぬと思へば……ハアうっかり冗談もいへない」と、痛い腰をさすりく、後をも見ず、宙を飛んで、その厭な娑婆の家に歸りま

したとき。

随分こたへたでせう、しつかりこたへたであらう。我等の胸に、召喚の勅命が、この位にこたへねば眞劔にはなれぬ。信仰だ、後生だ、人生だと云つたとして、煮え切らぬ中途半途な、不眞面目なものは、大抵この婆さんの仲間である。一つ吃驚して性根に入るほど、腹にこたへ徹底せねばならぬ。善知識の教語を何と聞くぞ。